アリアケジャパン サステナビリティ 2023

2024.08.01

アリアケジャパン株式会社は、「広く世界において健康で豊かな食文化の発展に寄与する」ことを基本理念とし、事業活動を通じて持続可能な社会の形成に貢献いたします。

アリアケジャパン株式会社

サステナビリティ経営戦略

アリアケジャパン株式会社は、事業活動とサステナビリティを調和させ、社会課題の解決、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献いたします。
そのために、基本方針、ビジョン、経営方針を定め、サステナビリティ経営を推進します。

基本方針：

当社は「広く世界において健康で豊かな食文化の発展に寄与する」ことを基本理念とし、事業活動とサステナビリティの調和により、持続可能な社会の形成に貢献します。

ビジョン：

21世紀の食文化クリエーター

経営方針：

1．天然素材を活かした事業そのもので循環型社会の構築に貢献
2．世界７極体制を基盤としたグローバルな成長
3．事業活動を通じて環境・社会課題を解決
4．時代のあらゆるニーズに応えるイノベーションの追求

会社案内
https://youtu.be/oEASeksbCn0

サステナビリティ委員会

サステナビリティ経営を推進し、持続可能な社会の形成に貢献するため、サステナビリティ委員会を設置いたしました。当委員会は原則として四半期に一回開催し、サステナビリティに関する方針、取り組むべき課題および施策の検討、施策の進捗状況を確認いたします。

取締役会

リスク委員会 — **サステナビリティ委員会** — **監査等委員会**

サステナビリティ委員会メンバー	
委員長	取締役社長
委員	取締役営業統括部長
委員	取締役経営管理室長
委員	第一製造部部長（EMS責任者）
委員	第二製造部部長
委員	技術開発部部長
委員	総務部部長
委員	生産管理部部長
委員	工務部次長

サステナビリティ実行チーム

2024.03現在

アリアケジャパン株式会社

マテリアリティ特定プロセス

アリアケジャパン株式会社では、関連する「社内外の課題」、「リスクおよび機会」、「ステークホルダーのニーズと期待」の３つの視点から課題を抽出し、その中からマテリアリティ（重要課題）を特定し、管理項目を設定いたしました。

STEP4：管理項目
特定したマテリアリティに対し、管理項目・KPIを設け、目標を設定し、活動。
定期的にレビューし、開示。

STEP3：妥当性の確認
特定したマテリアリティについて、
取締役会で審議、承認。

STEP2：マテリアリティの特定
サステナビリティ委員会において、STEP1で取り上げられたマテリアリティ候補について当社の経営、ステークホルダーおよび環境・社会におよぼすインパクトを評価しマテリアリティを特定。

STEP1：課題の把握
関連する社内外の課題、リスクと機会及びステークホルダーのニーズと期待を洗い出し、それらについて当社の取り組みを検討。

アリアケジャパン株式会社

マテリアリティ（重要課題）

アリアケジャパン株式会社は、持続可能な社会の形成に向けて以下のマテリアリティに優先して取組みます。

１．天然素材の健康で安全性の高い特性を活かした高品質の製品を安定的に供給します。サプライチェーン全体を通じて、持続可能性追求に取り組みます。　（既存カテゴリー製品：KPI1）

２．健康志向、少子高齢化、食の個別化、気候変動リスクの低減、資源の有効活用など、社会環境の変化に対応した製品の開発、提供をおこないます。　（新規カテゴリー製品：KPI2）

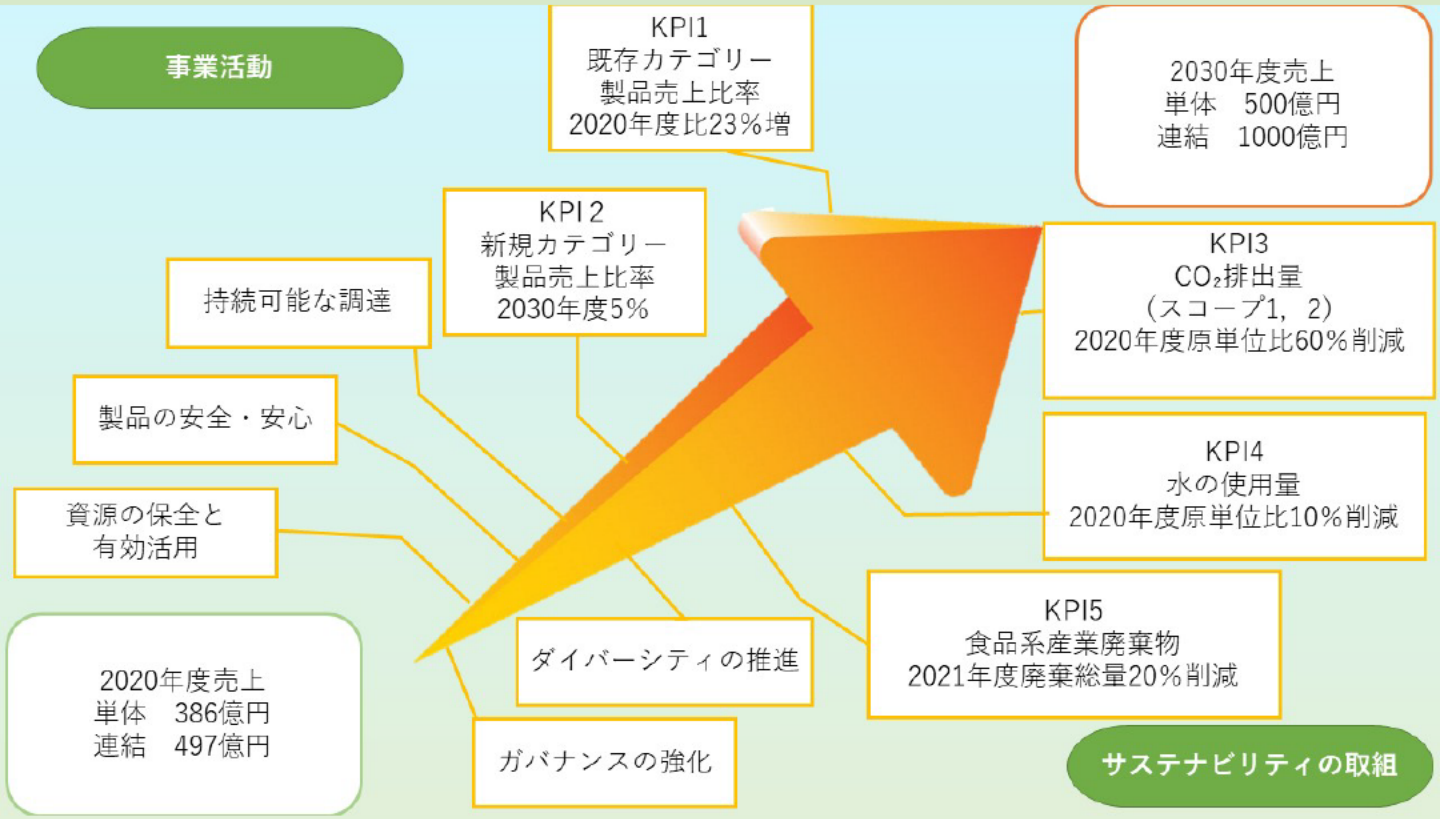
３．限られた資源を有効に活用し、省エネルギー、省資源、リサイクルの推進及び温室効果ガス、食品ロス、プラスチック等の廃棄物の削減を推進します。　（KPI3、4、5）

４．社員の人格、多様性を尊重し、一人ひとりの能力を発揮できる場と社員の成長の機会を提供し創造的で活力のある環境作りに努めます。

５．ガバナンスを強化し公正な経営体制を築くとともに、積極的かつ適正なコミュニケーションを図り、ステークホルダーの期待、信頼に応えてまいります。

アリアケジャパンの将来像

アリアケジャパン株式会社は、2030年度に売上高1,000億円企業を目指します。



アリアケジャパン株式会社の事業活動のベースとなる天然調味料事業は、畜産系の副産物である鶏がら・豚骨・牛骨から高付加価値のガラスープ、エキス類を製造するというサステナブルなものです。今後、天然調味料及びその関連製品である既存カテゴリーを更に成長させるとともに大豆や野菜を原料とするプラントベースの新規カテゴリーの製品をあらたに加え、2030年に海外子会社を含めた連結での売上高1000億円を目指しています。

アリアケジャパン株式会社

主要な取組指標(KPI) 中期計画

アリアケジャパン株式会社が特に取り組まなければならないマテリアリティにつきまして、中期計画における数値目標を以下のように設定いたしました。（単体）

KPI №	項目	2030年度 目標値	2023年度 実績	達成率 （%）
1	既存カテゴリー 製品売上増	23%増 2020年度売上比	15.6%	68%
2	新規カテゴリー 製品売上比率	5%占有 2030年度売上比	0.26%占有 2022年度売上比	5.3%
3	CO_2排出量 スコープ1・2	60%削減 2020年度原単位	△55%	92%
4	水の使用量	10%削減 2020年度原単位比	△15.9%	159%
5	食品系産業廃棄物 ※	20%削減 2021年度廃棄総量(4,271t)比	＋14.6% 4,897t	-73%

※食品系産業廃棄物につきましての分別データは2021年度より。

KPI 1　「既存カテゴリー」とは、天然調味料及びその関連製品（新規カテゴリー除く）2020年売上386億円に対する増加比率（%）

KPI 2　「新規カテゴリー」とは、プラントベース製品（当社基準指定パーツ3%以上含有）アニマルフリー製品など、2030年売上目標500億円に対する売上比率（%）

アリアケジャパン株式会社

環境データ（2023年度）

マテリアルバランス（連結）

input

- 電気　72,784,324kWh
- 水　1,349,949t
- LNG　28,943,887kg
- 原材料　125,100 t
- LPG　34,334kg
- 重油　887,000L

output

- 二酸化炭素排出量　67,650t-CO_2
- 排水　1,121,987t
- 産業廃棄物　29,279t

アリアケジャパン株式会社

環境データ（2023年度）

マテリアルバランス（単体）

input

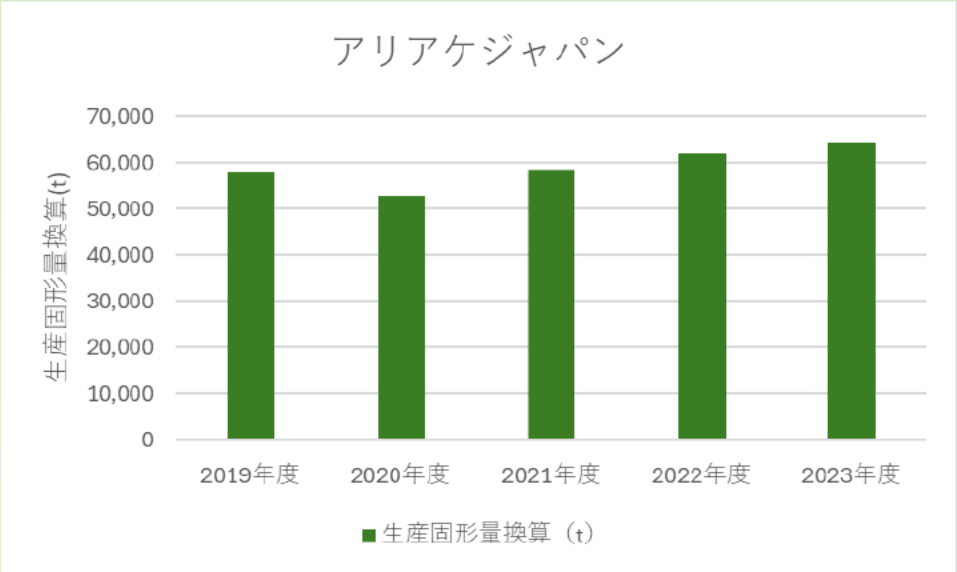
• 電気	47,375,426kWh
• 水	816,814t
• LNG	6,331,620kg
• 原材料	71,821 t
• LPG	25,381kg
• 重油	887,000L

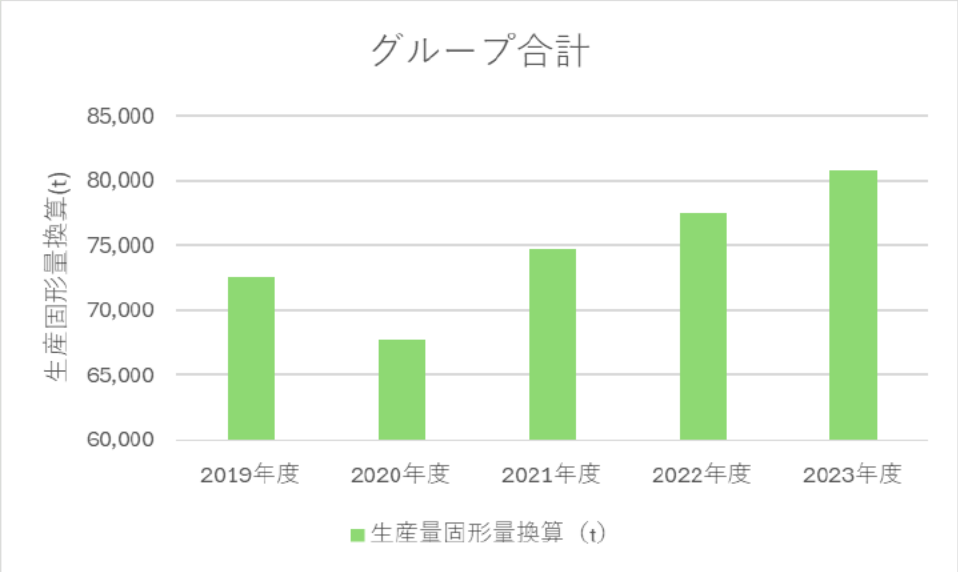
output

• 二酸化炭素排出量	19,584t-CO_2
• 排水	707,443t
• 産業廃棄物	8,871t
• 食品系産業廃棄物	4,897t

アリアケジャパン株式会社

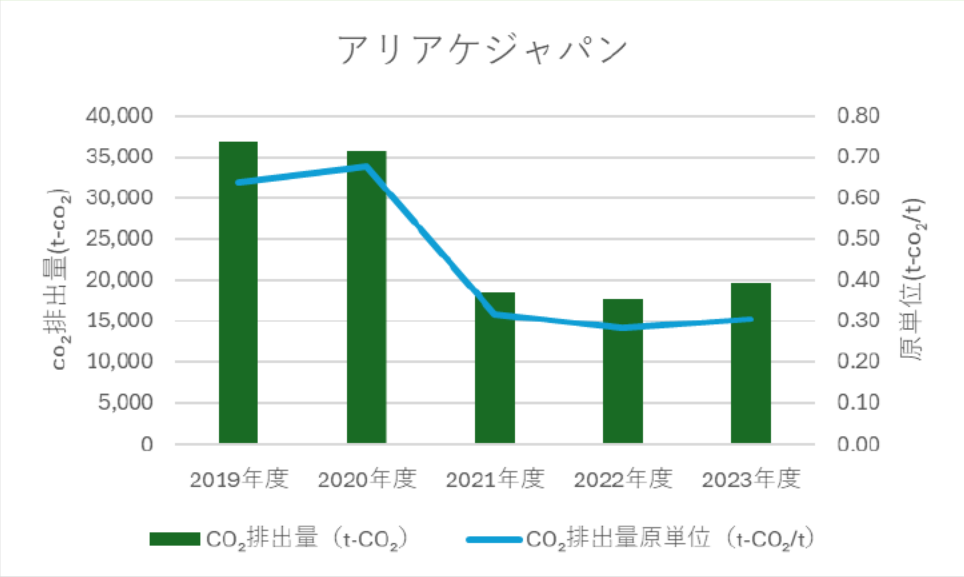
生産量の推移

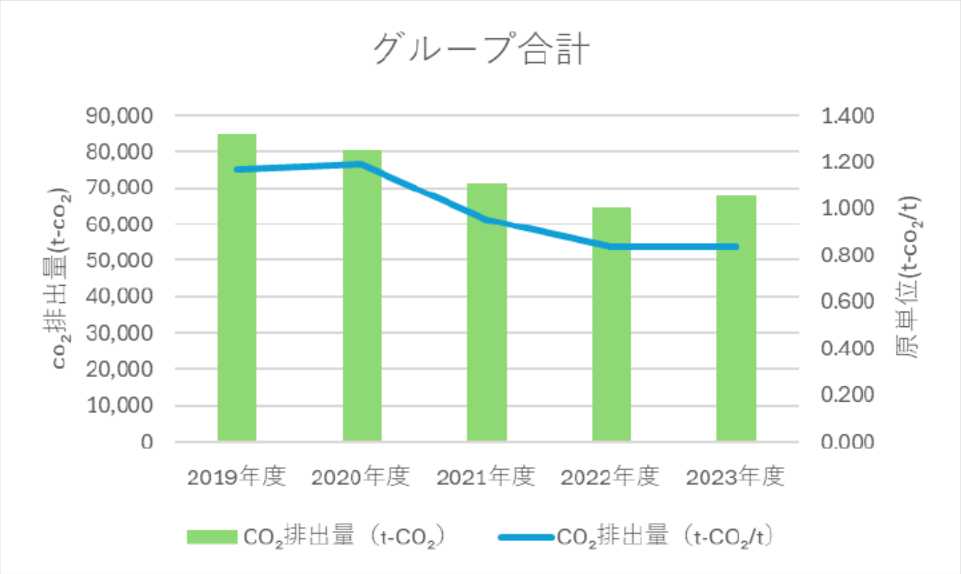




※グループ：青島有明食品有限公司（中国）、F. P. Natural Ingredients SAS（フランス）、Ariake Europe NV（ベルギー）、Henningsen Nederland B.V.（オランダ）、□□□□□□□□□□□□□（台湾）、PT. Ariake Europe Indonesia（インドネシア）（以下同）

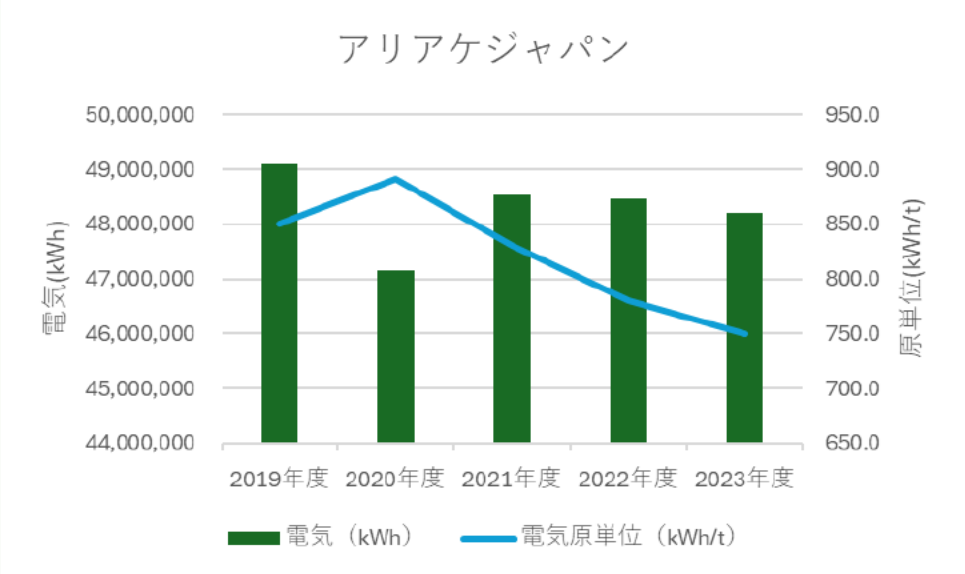
二酸化炭素排出量の推移

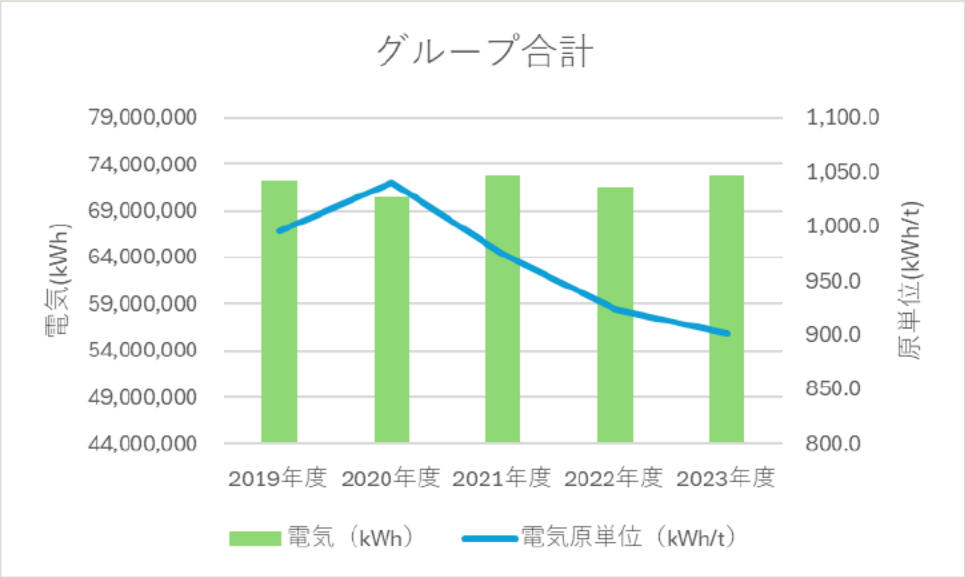




アリアケジャパン株式会社

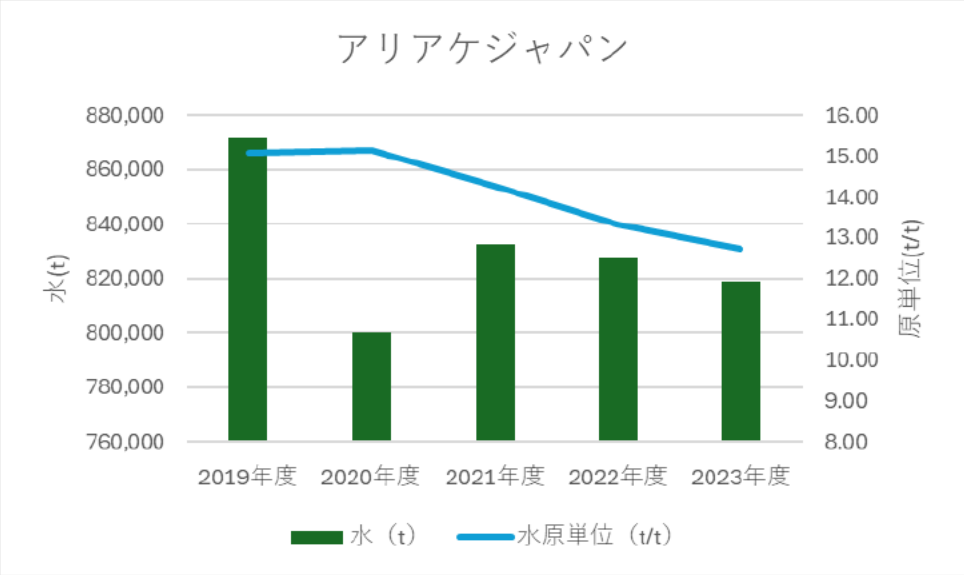
電気使用量の推移

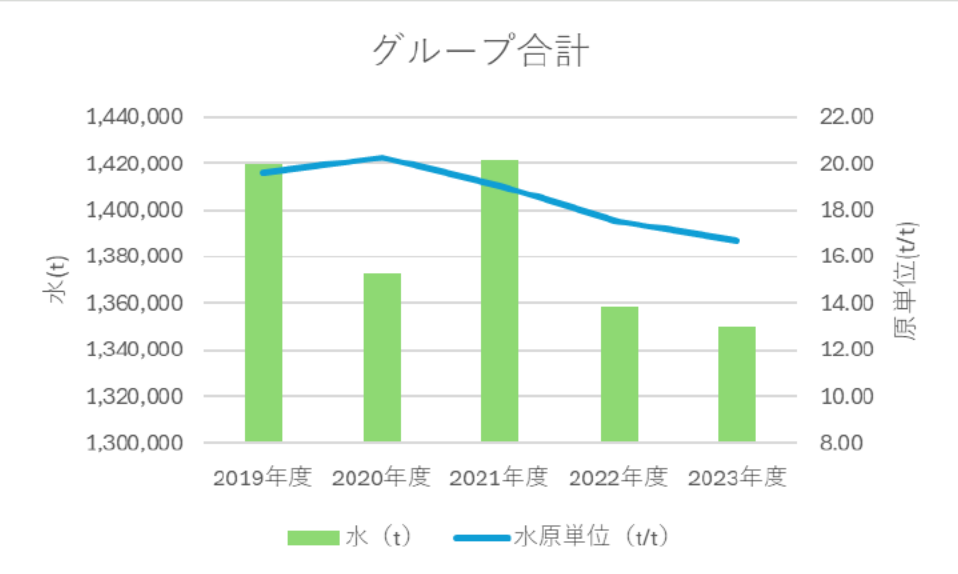




アリアケジャパン株式会社

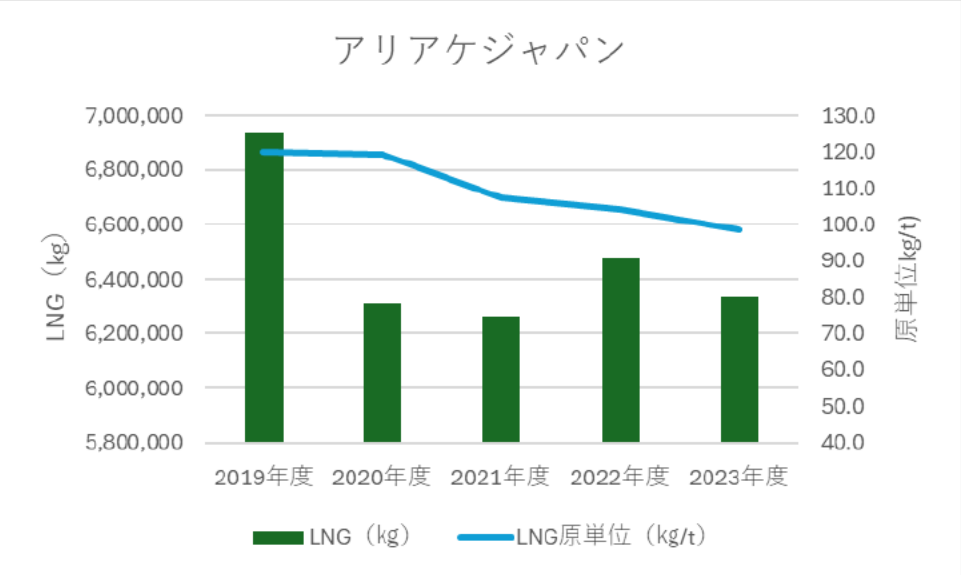
使用水の推移

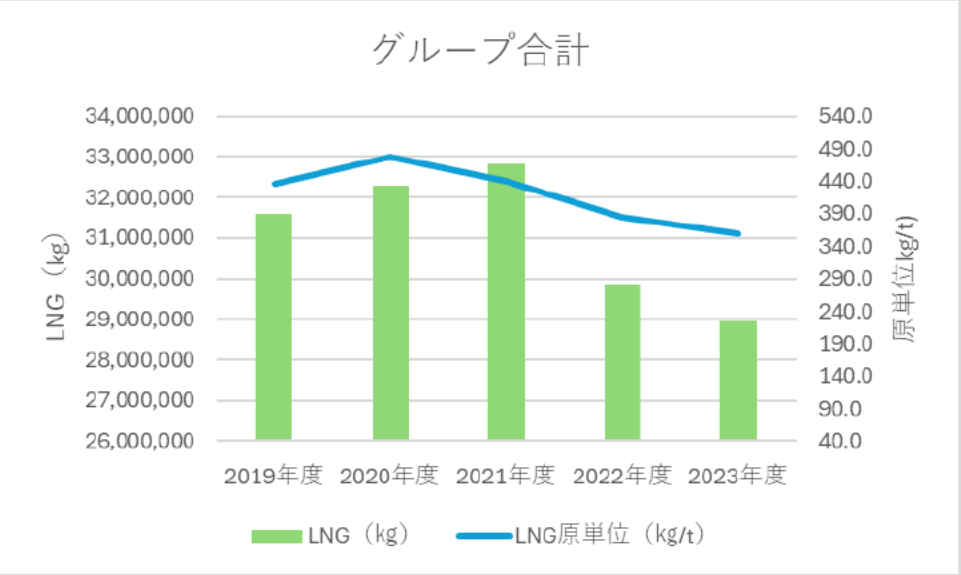




アリアケジャパン株式会社

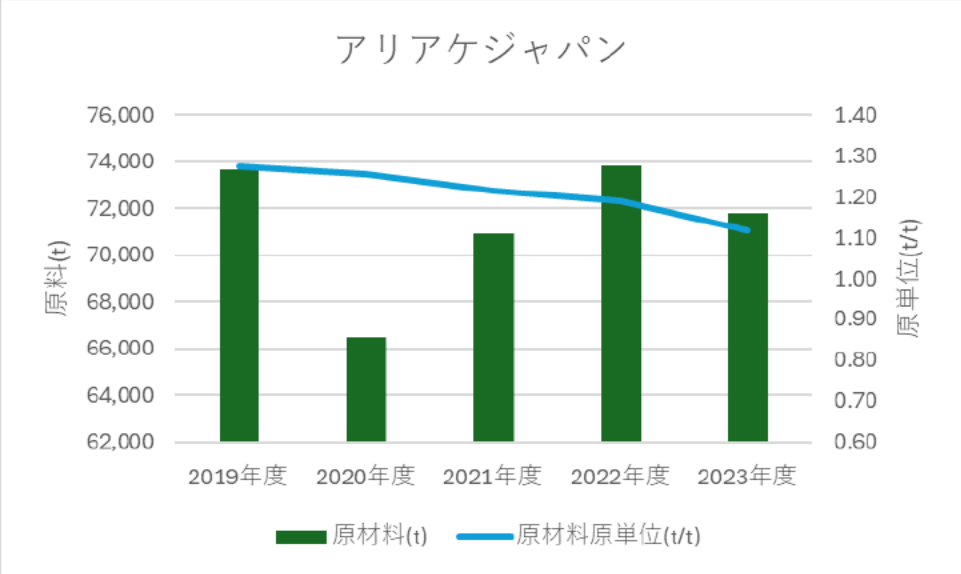
LNG使用量の推移

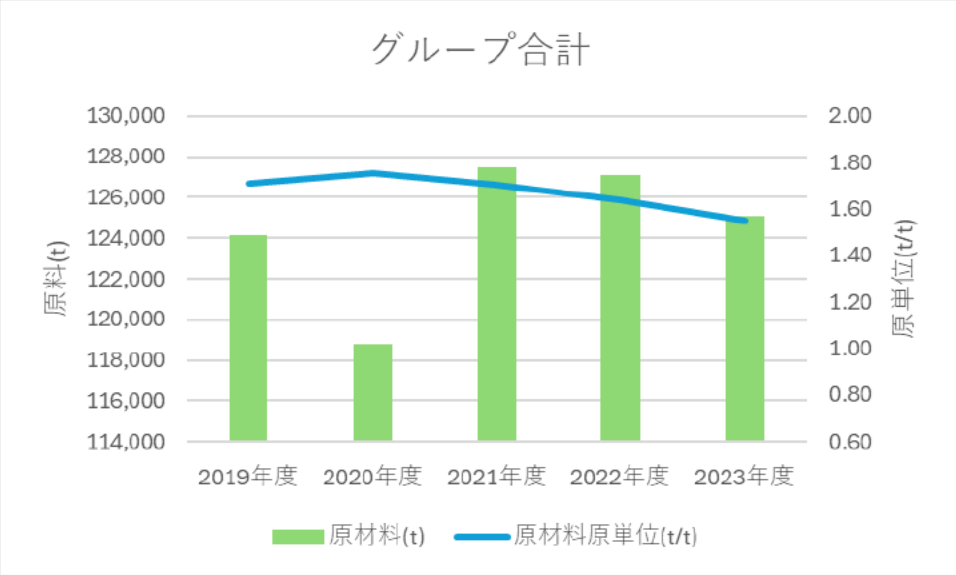




アリアケジャパン株式会社

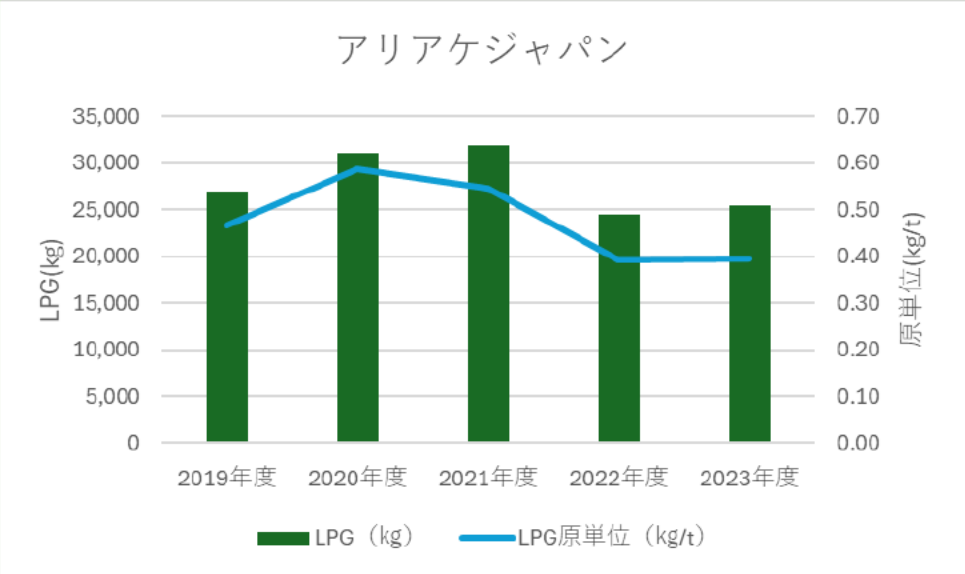
原材料の推移



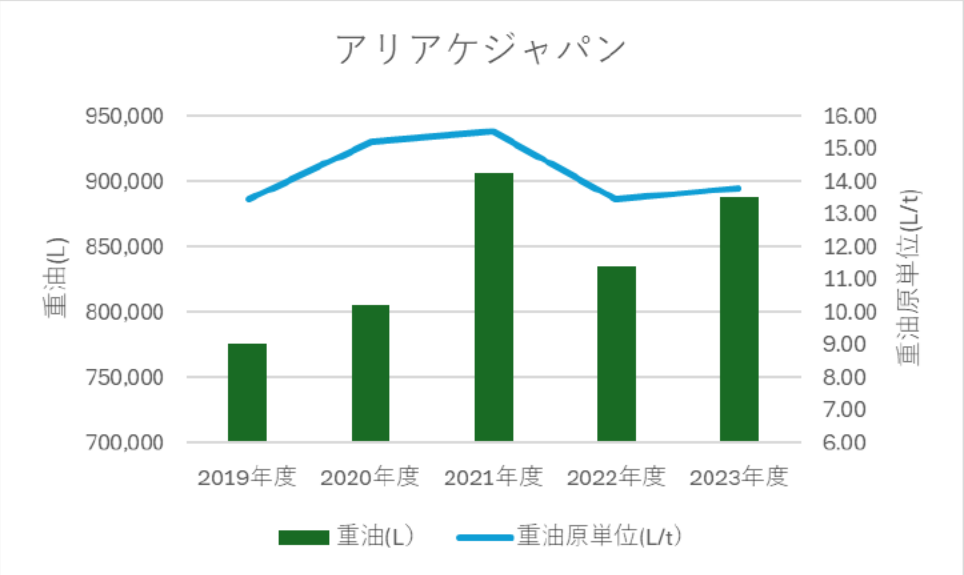


アリアケジャパン株式会社

LPG使用量の推移

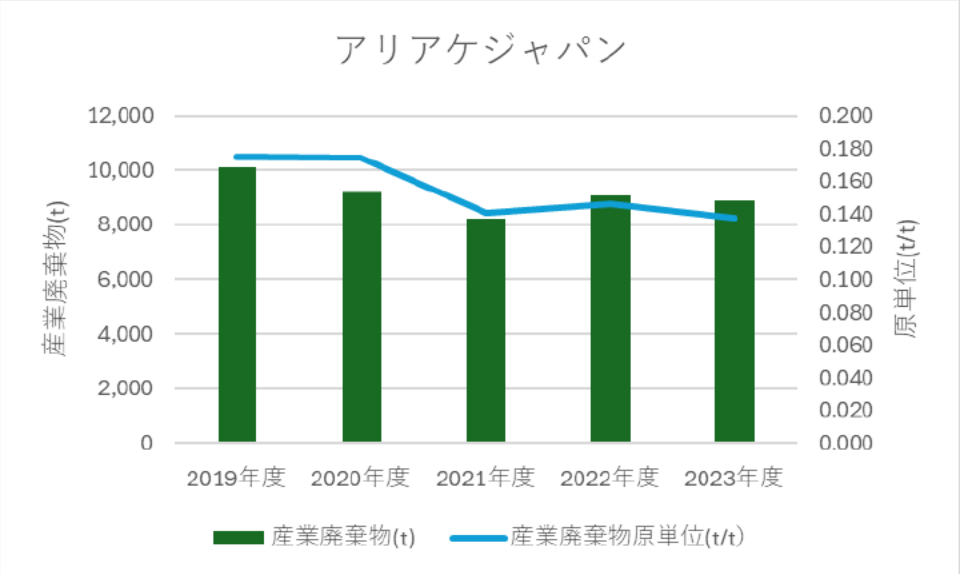


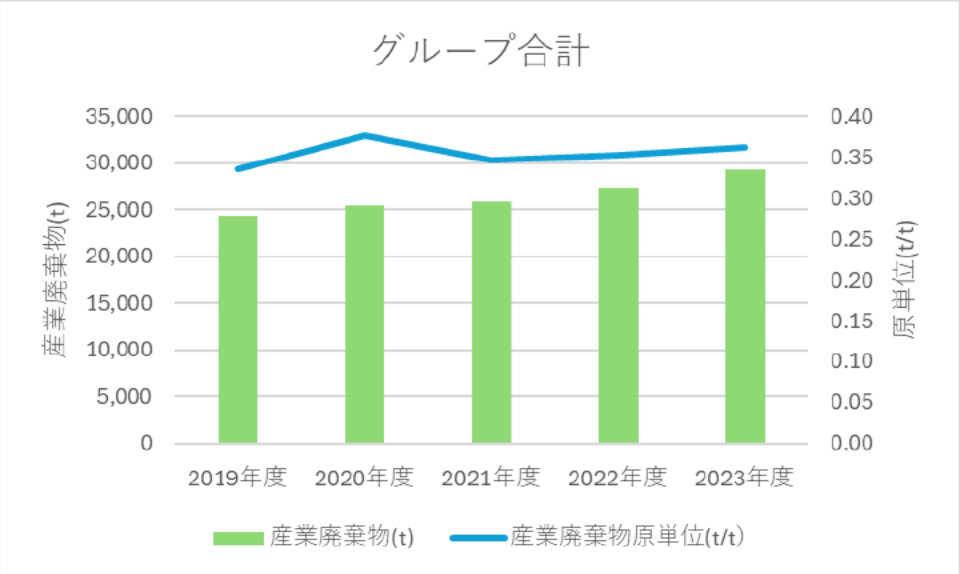
重油使用量の推移



アリアケジャパン株式会社

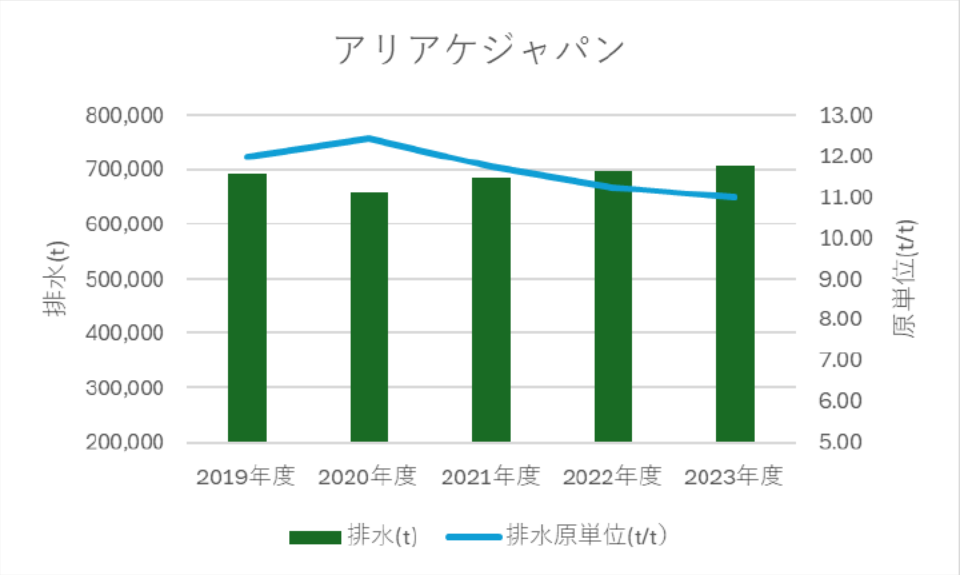
産業廃棄物量の推移

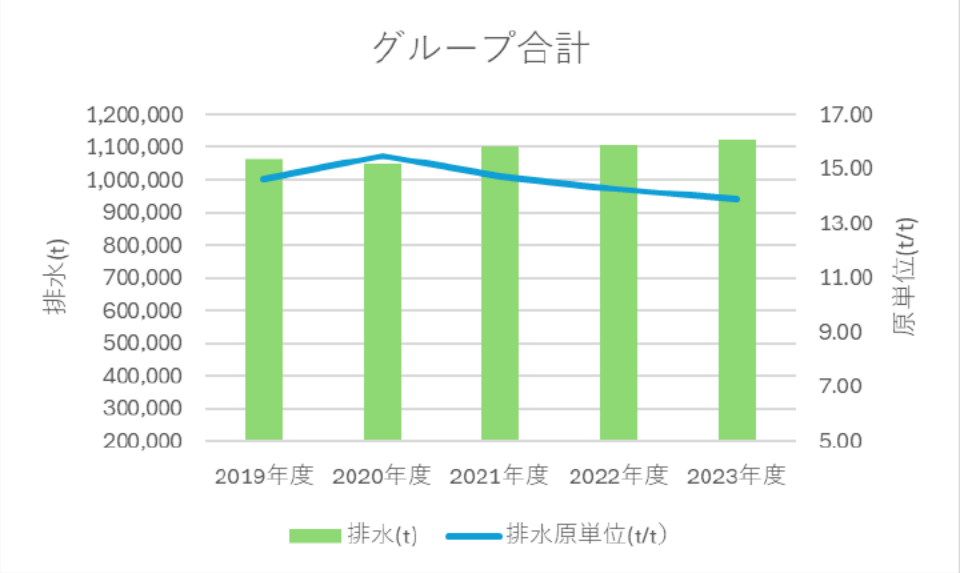




アリアケジャパン株式会社

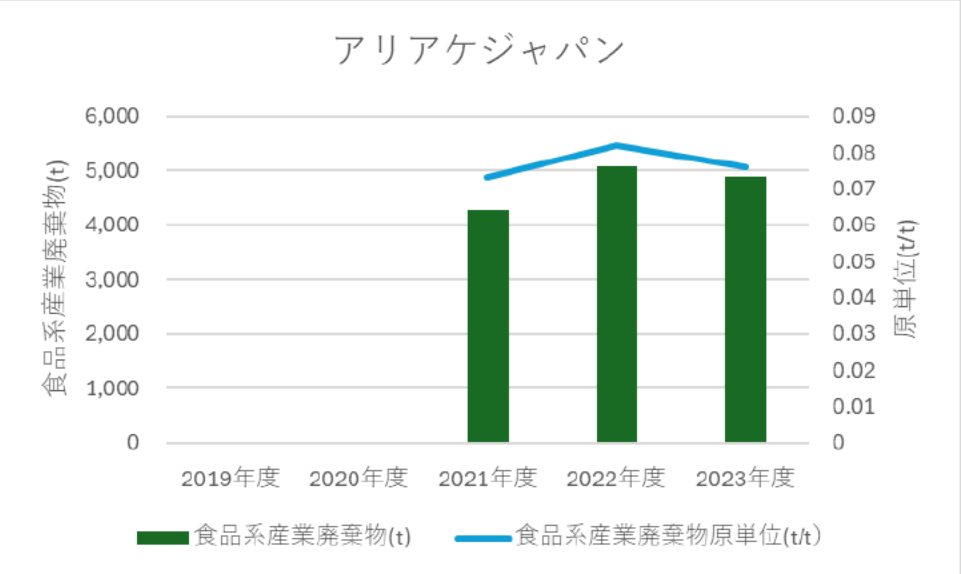
排水の推移





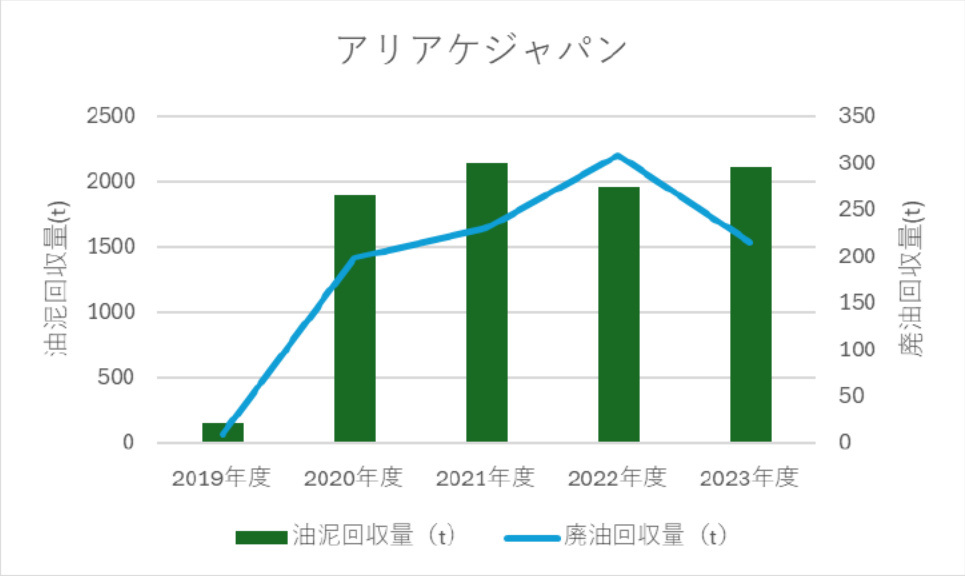
アリアケジャパン株式会社

食品系産業廃棄物の推移



アリアケジャパン株式会社では、食品系産業廃棄物を計量しています。(2021年度より開始)

廃油・油泥回収量の推移



アリアケジャパン株式会社

人事・労務データ（単体）

従業員数（人）		2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
		合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性
従業員		893	601	292	914	612	300	915	614	301	911	607	304	927	611	316
	基幹職（課長以上）	60	60	0	60	60	0	64	64	0	63	62	1	66	65	1
	一般職	767	523	244	787	534	251	780	526	254	769	514	255	780	513	267
	嘱託	34	18	16	32	17	15	34	23	11	37	1	36	35	2	33
	パート	32	0	32	35	1	34	37	1	36	36	1	35	33	1	32

（）内は男女比

従業員比率（%）		2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
		合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性
従業員　合計			67%	33%		67%	33%		67%	33%		67%	33%		66%	34%
	基幹職（課長以上）		100%	0%		100%	0%		100%	0%		98%	2%		98%	2%
	一般職		68%	32%		68%	32%		67%	33%		67%	33%		66%	34%
	嘱託		53%	47%		53%	47%		68%	32%		3%	97%		6%	94%
	パート		0%	100%		3%	97%		3%	97%		3%	97%		3%	97%

障碍者雇用（人）	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
人数	20	22	22	23	24
比率	2.2%	2.4%	2.4%	2.5%	2.6%

年齢、勤続年数		2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
		合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性
	年齢	39.2	37.3	43.0	39.5	37.6	43.4	40.1	38.1	44.0	40.5	39.2	43.2	41.2	39.7	43.8
	勤続年数	11.1	12.1	9.0	11.3	12.4	9.2	11.8	12.9	9.6	12.6	13.8	10.3	12.9	14.3	10.5

育児休暇制度		2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
		合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性
取得・利用者数（人）																
	育児休職	11	0	11	7	0	7	12	3	9	10	0	10	7	3	4
	育児短時間勤務	6	0	6	9	0	9	8	0	8	4	0	4	3	0	3
	子供看護休暇	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
取得率																
	育児休職	100%	0%	100%	100%	0%	100%	100%	13%	100%	100%	0%	100%	38.9%	21.4%	100.0%
育休取得平均日数（日）		-	0	273	-	0	372	295	31	279	314	0	314	176.5	19	334
復職率		100%	0%	100%	100%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	0%	100%	100.0%	100.0%	100.0%
定着率		100%	0%	100%	100%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	0%	100%	100.0%	100.0%	100.0%

人事・労務データ(グループ合計)

従業員数			2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
			合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性
グループ合計	従業員		1,345	881	464	1,374	890	482	1,404	910	494	1,394	907	487	1,431	930	501
		基幹職（課長以上）	112	97	15	109	95	14	117	105	12	115	102	13	118	103	15
		一般職	1,138	742	396	1,148	747	399	1,147	741	406	1,125	724	401	1,156	745	411
		嘱託	63	42	21	72	45	27	77	48	29	90	37	53	82	29	53
		パート	32	0	32	45	3	42	63	16	47	58	15	43	62	23	39

従業員比率			2019年度			2020年度			2021年度			2022年度			2023年度		
			合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性
グループ合計	従業員			66%	34%		65%	35%		65%	35%		65%	35%		65%	35%
		基幹職（課長以上）		87%	13%		87%	13%		90%	10%		89%	11%		87%	13%
		一般職（一般、準、臨時）		65%	35%		65%	35%		65%	35%		64%	36%		64%	36%
		嘱託		67%	33%		63%	38%		62%	38%		41%	59%		35%	65%
		パート		0%	100%		7%	93%		25%	75%		26%	74%		37%	63%

取組事例紹介

電気の削減

・太陽光発電

九州第二工場屋根の太陽光発電（出力2.6MW）に加え、2022年にパックセンター１・2屋根、第一・第二工場の全ての駐車場カーポートに自家消費用（PPA）としてあらたに設置致しました。出力2.6MW、年間300万kWh発電、二酸化炭素排出量約1,360t/年削減になります。尚、本事業は、環境省の「ソーラーカーポート等の新たな自家消費型太陽光導入支援事業に関する優良事例」に選出されております。

電気の削減

・電気使用設備の最適化

冷凍設備への進相コンデンサーの設置（12万kWh/年削減）、エアコン室外機の最適運転装置設置（60万kWh/年削減）、ポンプのインバーター化、エアコンプレッサーの運転の最小化などの節電の取組を進めております。

取組事例紹介

使用水の削減

・クーリングタワー節水

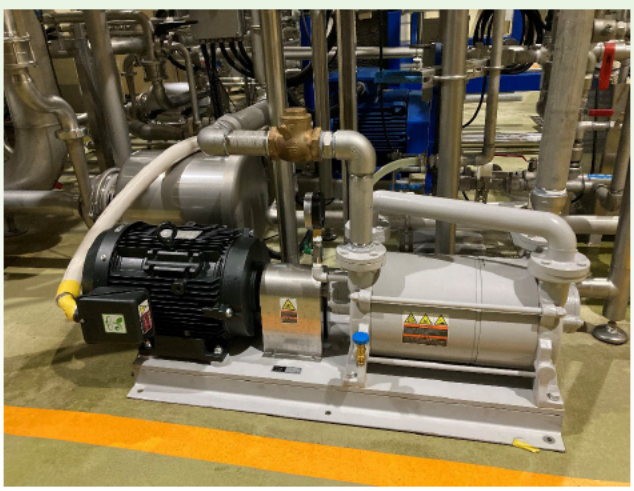
クーリングタワーへ、清浄な冷却水を回収再利用を行う事で、節水と冷却エネルギーの再利用へ繋げました。

・スクラバー節水

清浄な水を回収し、スクラバーの補給水として使用することで、水の再利用が可能となりました。

・濃縮シール水の循環

濃縮機の濃縮シール水を循環再利用することで節水へ繋げました。



取組事例紹介

LNGの削減

・LNG気化機の変更およびその冷気の使用

工場で使用する蒸気を発生させるボイラーの燃料であるLNGの気化機を蒸気式から空温式に更新し2021年4月から稼働いたしました。

これによりLNGの約9%が削減され、二酸化炭素排出量も約2,000t/年（約6%）削減されました。

さらに、気化する際に冷気が発生しますので、この冷気を工場内温度管理（冷房用）に有効活用しています。

・熱エネルギーの回収

蒸気ドレン水の回収、ボイラーのフラッシュ蒸気、高温排ガス、濃縮ブロー水などからの熱回収を行い、ボイラー給水、製造使用温水加熱熱源として再利用しています。今後も更なるエネルギーの効率化、回収、再利用に取り組んで参ります。

取組事例紹介

フードロスの削減

・未利用野菜の利活用

香味オイル製造などに使用され、その後廃棄されていた野菜を回収し原料として有効活用することで食品廃棄物の削減、資源の有効利用を行っています。

廃棄物の有効利用

・オイルの回収、燃料化

廃棄物としてこれまで排出されていた抽出残渣からオイル（動物油脂）を回収してバイオ燃料として有効利用を行っております。

また、排水処理設備から発生する油泥、スカムなどからもオイルを回収して同様に燃料化を行っています。1770t/年間（2022年度実績）のオイルを燃料として再利用しています。

取組事例紹介

人材育成

・教育

外部専門コンサルタントを講師とした役員候補の幹部研修、管理職向けオンラインビジネススクール履修、DX人材育成Webセミナー、外部講習会受講などの育成手段で人的資本の強化に取り組んでいます。

労働安全

・教育

安全で働きやすく、働きがいのある会社を目指し、労働安全衛生活動に積極的に取り組み従業員の心と体の健康と幸福な社会生活を実現するとともに、講習会、セミナーや社内研修会など人材育成の機会を提供しています。

アリアケジャパン株式会社

取組事例紹介

環境意識

・地域コミュニティ

地域の清掃活動を通じて、環境美化への意識の向上と地域コミュニティへの参加を進めています。
また、近隣の小学生・中学生を招いての工場説明会を実施しています。

代替エネルギー

・バイオ燃料の利用

アリアケジャパンで使用している一部のトラックやエンジンフォークリフトの燃料として、バイオディーゼル燃料を使用しています。

取組事例紹介

ダイバーシティ

当社は女性、外国人、高齢者、障がい者など多様な人材を採用し、多様性を尊重しその能力を発揮できるよう環境整備に努めています。

事業拡大中のアジアや欧州の海外子会社には経験・知見、異文化や多様な環境への適応性など総合的に評価し適性が認められる中途採用者を派遣しています。

ガバナンス

当社は、アリアケグループで働くすべての従業員は人々の健康と安全に深くかかわる「天然調味料」事業に携わるものとして、コンプライアンスはもとより、高い倫理観と誠実性、公正性に根差した社会良識をもって行動するよう「アリアケ企業行動基準」を定め、そのポリシーを浸透させています。

原材料やサービスの調達に関しては「サステナビリティ調達ガイドライン」を定め、サプライチェーンにおける持続可能な調達に取り組んでいます。

また、多様なステークホルダーの期待、信頼にこたえるため積極的かつ適正なコミュニケーションを図るとともに企業価値の向上に努めております。

外部識者の意見

長崎県立大学　津久井　稲緒　准教授

私は、経営学、CSR（企業の社会的責任論）を専門としており、近年のサステナビリティ経営に関する論点から、特に三点をコメントします。

第一に、「マテリアリティの特定」について、現代は「ダイナミックマテリアリティ」という考え方に基づいています。ダイナミックマテリアリティとは、「マテリアリティは時代により変化する動的なもの」という考え方で、これまで考慮してこなかったテーマが重要なものとして時を越えて浮上してくるというものです。この考え方によれば、マテリアリティの特定では、今回特定したマテリアリティそれ自体と、その特定プロセスでの議論が重要となります。今回は外しているが、今後重要性が増すかもしれない課題を広く検討するプロセスが、次の時代のマテリアリティを見る力を社内に養います。

アリアケジャパンのマテリアリティ特定プロセスは、サステナビリティ委員会を設けて、「社内外の課題」、「リスク及び機会」、「ステークホルダーのニーズと期待」について、現場と本社機能が一体となり議論・検討・設定したと伺いました。本作業にかける時間を今後も充実させ、多様な観点からの意見を経営中枢に吸い上げることが求められます。

第二に、「持続可能な原材料の調達」について、「人権デューデリジェンス」（供給網全体で人権侵害を把握・改善する取り組み）が求められます。現代企業には社会課題への対応策として、二つの観点から責任を果たすことが求められています。一つにはイノベーティブな事業を安全・適正に展開する役割責任と、もう一つには複雑なサプライチェーンを通じたビジネスが及ぼす結果責任を果たすことです。特に、アリアケジャパンのグローバルな事業展開においては、「人権デューデリジェンス」が今後益々重要になってくると考えられます。

2011年に国連人権理事会で合意された「ビジネスと人権に関する指導原則」を受けて、企業に人権尊重を求める動きが国際的に加速しています。欧米諸国を中心に関連の法制化も進んでいます。アリアケジャパンも、サステナブルな原料調達について、現地のグループ会社やステークホルダーと共に、人権デューデリジェンスに取り組んでいくことが求められます。

第三に、「事業活動の推進」や「ダイバーシティの尊重」に関係して、同社は「人材育成の強化」を様々な取り組みにより進めています。今後もさらに進めていくために、海外拠点における現地従業員の管理職比率の向上や、社員のサステナビリティ意識の向上を図っていくことも重要と思います。前者は、企業がグローバル化を進める中で求められる「真の現地化」を測る指標の一つといえます。また後者については、例えば、社員が個人的に行っている社会貢献活動やプロボノなどへの支援も今後の検討課題と言えます。

最後に、アリアケジャパンは基本理念に「広く世界において健康で豊かな食文化の発展に寄与する」ことを掲げており、一朝一夕に築き上げることは難しい、創業時から一つ一つ積み上げてきた、事業と技術、環境課題への取り組み、地域社会との関係性などを保有しています。具体的にそれらは、電気・使用水・LNG等の削減や、チャレンジングなアリアケファームでの資源循環型事業モデルの構築などに表れています。今後も基本理念に忠実に、サステナビリティ経営をさらに進めていくことを期待しています。

津久井　稲緒（ツクイ　イナオ）准教授
長崎県立大学　経営学部
経営学科

外部識者の意見

長崎県立大学　芳賀　普隆　准教授

私は、環境経済学、環境政策論を専門としており、ごみ問題や地域の再生可能エネルギーの普及に関する研究を行っている観点から、筆者が貴社の取り組みに着目した点について言及いたします。

まず、九州第二工場屋根の太陽光発電に加え、バックセンターや第一・第二工場の全ての駐車場カーポートに自家消費用（PPA）として新たに設置しております。2.6MWは全国的にも非常に大規模でありますし、相当量の電力量削減を実現しております。また、本事業は、環境省の「ソーラーカーポート等の新たな自家消費型太陽光導入支援事業に関する優良事例」に選出され、社会的にも評価されているなど、素晴らしい取組みだと思います。

また、近年、サーキュラーエコノミー（循環経済）が注目されていますが、ガラを煮込んだ後の製造工程における一貫した廃棄物の有効活用、植物性残渣・未利用野菜の有機肥料への活用、オイル回収及びバイオ燃料化としての有効利用など、それぞれが興味深い試みだと思います。その他にも、水使用量削減やLNG及び重油使用削減、排熱利用の拡大も推進していることを伺いました。一方で、いくつかの課題についてもご指摘いたします。

第1に、昨今、地震や台風、豪雨といった災害が頻発している中、地方自治体・企業問わず、災害用非常用電源の確保が求められます。特に、食品企業ということで、電源喪失による工場の操業停止は、原材料の冷凍保存などへの影響が懸念されるところです。

第2に、「アリアケジャパンサステナビリティ」の統計データで増加傾向にある、産業廃棄物量（グループ企業全体）、食品系産業廃棄物（会社単体）を引き続きどう削減していくか、です。

第3に、議論の中でも出ていた、資源利用削減、環境負荷低減、電子化の観点からペーパレス化をいかに進めるか、は貴社の大きな課題であろうと認識しております。

さらに、貴社が作成・公表されている「アリアケジャパンサステナビリティ」及びご説明いただいた「アリアケジャパンサステナビリティ2022」は、サステナビリティ報告書に相当するものであります。貴社において、KPI（Key Performance Index、重要業績評価指標）を掲げ、SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）との紐づけをしながら、諸課題の解決に邁進しているところであると認識しております。また、経営方針や組織体制、現状の統計データも併せて示されております。その一方で、KPIとのかかわりにおいては、環境関連分野の場合、CO2排出量や水の使用量、食品系産業廃棄物の項目にとどまっております。再生可能エネルギー導入や省エネ、フードロス削減、プラスチック削減など、もう少し項目の細分化を図り、項目を増やすとともに、どこまで目標が達成できており、直面している課題がどこにあるのか、と併せて開示していくことも必要ではないかと思います。また、報告書に掲載されている現状の統計データに対して、企業自体としてどう評価しているのか、のコメントもあるとよいのではないかと思います。

今後も、アリアケジャパンにおけるサステナビリティの取り組みに注目し、期待するとともに、地域発展及び環境・経済・社会貢献における、貴社のますますのご発展を祈念いたします。

芳賀　普隆（ハガ　ヒロタカ）准教授
長崎県立大学　地域創造学部
実践経済学科

外部識者の方々のご意見を受けて

当社は、「広く世界において健康で豊かな食文化の発展の寄与する」ことを基本理念とし、事業活動とサステナビリティの調和により、持続可能な社会の形成に貢献してまいりました。当社の事業活動のベースとなる天然調味料事業は、畜産系の副産物である鶏がら、豚骨、牛骨から高付加価値のガラスープ、エキス類を製造するというサステナブルなものです。

今後は、天然調味料及びその関連製品である既存カテゴリーを更に成長させるとともに大豆や野菜を原料としたプラントベースの新規カテゴリーの製品をあらたに加え、更なる成長を目指してまいります。

この度、当社の「サステナビリティの取組」に関する報告書をまとめるに際し、当社の製造拠点である九州工場が立地する地元長崎県の長崎県立大学芳賀先生、津久井先生に第三者ご意見をいただきました。お忙しい中、九州工場をご訪問、ご見学、ディスカッションして頂いた上に大変参考になるご提案を頂戴し、厚くお礼申し上げます。

当社は九州工場をマザー工場として、グローバルな世界7極体制を築いております。今後は、頂戴いたしましたご提案をしっかり受け止め、九州工場を核として、日本国内におけるサステナビリティの取組をより深化及び進化させるとともに、世界各国のグループ会社への幅広い展開を進めてまいります。

アリアケジャパンは、笑顔あふれるサステナブルな食の未来を築く「21世紀の食文化クリエーター」として、持続可能な社会の実現のために社会的責任を果たしてまいります。

代表取締役　白川直樹